

第2章・第51期生 第1回櫻華塾 ～新時代を共に生き抜く 拓く！未来へ飛翔～

年が改まり、大寒が間近になった1月17日、12月に行われた入塾式に引き続き、第2章櫻華塾51期生の第1回勉強会が尾崎財団応接室で開催されました。暖冬と言われておりますが吹く風はやはり冷たい中、この日を楽しみにしていたメンバーが、相馬雪香先生が使っていらっしゃった応接室に集い、大きな尾崎弔堂のお写真や壁一面の書棚に囲まれ、身を引き締めて着席いたしました。

まず、小山副会長・事務局長が、阪神淡路大震災からちょうど21年目を迎えた今朝5時46分、あの日のことに思いを馳せていたところ、一冊の会が送った鉛筆がテレビに映り、感無量の思いであったと話されました。

開会に先立ち、第2章櫻華塾51期生のリーダーとなった山内さんが皆さまに挨拶し、改めて今までの櫻華塾の制度を一新し、新しい櫻華塾が始まったことを宣言いたしました。今までの人脈中心で集まっていた52グループの櫻華塾にはそれぞれに級長がおりましたが、第2章より先輩も若者も皆が共に学ぶ51期生のリーダーとして若輩ではございますがしっかり務めて参りますと、決意を表明しました。

そして、最も若手の瀬澤伸子さんが「前回参加し大槻会長の教育への思いを感じました。先輩が堂々と話しをしている姿を見て、私も皆さんのように自立できる女性になりたい。」としっかりと自分の意志を表明されました。また、副リーダーの瀧川さんは残念ながらどうしても外せない用事で欠席でしたが、前回の感想を若手の椎名さんに託しており「相馬先生のように、大衆の意見に流されるのではなく自らの信念に基づいて行動できる自分で在りたいと思います。その為にも、情報を読み解く力、物事を俯瞰的にみて考え抜く力を養い学び続けて参ります。」と椎名さんが代読しました。最後に赤田が「先輩の皆さまの力があってこそ、こんにちのように幅広い活動を行えているのだと、改めて感じました。」と話させていただきました。

塾長を務める大槻会長から、本日は、大きく3点のお話がありました。

① 一冊の会創設の原点「弱者への支援」の始まり、浴風会へのオムツの寄贈について

今回が新体制第1回ということで、50年前の一冊の会創設について、大槻会長からお話がありました。それはある日、とっても素敵な傘をさした婦人と大槻会長の出会いから始まります。道で挨拶を交わすようになったその婦人は、家父長制度の歪ひずみに翻弄された人生を送り、浴風会が運営する養護老人ホームに入っていました。その宿命に同情した大槻会長は「私に何かできることがないですか？」と尋ねたところ、自分よりも他の入居者でオムツが無くて困っている人がいるから、オムツが欲しいとのことでした。そこで、浴衣をほどいて洗ってオムツを作り、履きやすいような工夫をし、もっと量を送るために仲間を募りました。そして、反たんや疋ひきといった単位で沢山の晒さらしを買いました。その後、品物は変わりましたが、その延長線上で寄贈を続け、創立90周年を迎えた浴風会から感謝状を頂きました。



浴風会について

社会福祉法人浴風会の歩みを簡単にまとめた資料をお配りし、若手の村岡から説明いたしました。また、感謝状をいただいた時の様子は万葉1079号でお知らせしております。

浴風会への寄贈活動を始めたのは1965年ですが、一冊の会という名前をつけたのは1967年に相談役の故酒井悌先生が「名前をつけよう」提案して下さった時です。50年前は本が大変貴重な時代でしたが、年間一人一冊の本を持ち寄り、僻地に寄贈する活動を行ってまいりました。その活動と、キャッチフレーズ「見てみよう、聞いてこよう、語り合おうよ友好の輪、10人の友を作ろう」をお話したところ、酒井先生は「教育、文化、平和を創る活動だね」とおっしゃって下さり、そのような活動になるようお願いと決意を込め「一冊の会」と名付けました。

② 阪神淡路大震災に支援をすることになったきっかけと一本の鉛筆について

阪神淡路大震災の支援活動は、学校の先生が一冊の会を調べ依頼の電話を大槻会長の家にかけたことで始まりました。いつも昼間は家にいない会長が、偶然家に戻ってきており電話をとれたことも、ただの偶然ではなかったのかもしれませんが。大槻会長と小山副会長と中学生の会員の3人で、鉛筆をリュックに詰めて神戸に向かいました。その時配った鉛筆を持っている方が、今朝テレビに出て「ずっと持っていた」と語っていたそうです。一本の鉛筆を通して真心の支援は通じたのだと嬉しく思いました。

③ JR 総連を表彰したのは、アフガニスタンに対する識字支援にお力を貸して下さったから

「50周年感謝の集い」で1団体だけ JR 総連を表彰いたしました。当時のいきさつを知らない会員も増えたことから、改めてお話しがありました。JR 総連はアフガニスタンに対する識字支援にお力を貸して下さいました。詳しくは、冊子「万葉」の創刊号41ページに、2002年に大槻会長がアフガニスタンを訪問した時のことを載せております。

最後に、石田理事長から、社会貢献とは人により色々な気持ちで行っていることで、それぞれの団体によって違いがあるが、一冊の会は手作りの会であって、だからこそ伝わる心がある。単に物を送っているわけではなく、心を送っているのです。集まった1人1人の気持ちが相手に伝わるような活動を続けていきたいと思います、お話しがあり、第2章を迎えましたが、今後活動するうえでの基本的な気持ちは変わらないことを再確認いたしました。

今回は2月28日を予定しております。講師は佐藤啓太郎大使です。皆勤賞を目指し、風邪をひかないよう体調を整えて臨みたいと思います。



終了後に記念撮影

タンザニア大使からの真心のかたち～思いがけない嬉しいプレゼント～

勉強会終了後、石田理事長から昨年12月9日のタンザニア大使館のお茶会に参加したメンバー1人1人に一通の封筒が手渡されました。色鮮やかなタンザニア共和国の紋章が誇り高く記された、タンザニア共和国バチルダ・S・ブリアン全権大使からの御礼状でした。

常日頃から一冊の会の「真心」の友好活動に感謝していること、親善大使による友好の証である演奏に対して大変感動していること、そしてヤンググループの村岡が一冊の会の総意としてのメッセージを英語翻訳スピーチしたことに大変お喜びになられていると大変嬉しいお言葉が書いてありました。

一冊の会ではバチルダ大使への御礼として「真心」のお返しとして、桜をモチーフにした色紙に大槻会長、小山副理事がデザインした御礼の絵とメッセージと出席した代表メンバーが署名をしたものを贈らせて頂きました。一冊の会の日頃の「真心」が大使に伝わり、大使から「真心」のプレゼントのとても幸せな返礼。大槻会長・小山副理事長に倣い一冊の会の「真心」のサイクルを繋げて参ります。

